

「年男の履歴書」

ごとうクリニック

後藤 博茂

私は昭和26年に宮崎県延岡市で生まれた。都会の北九州と違い、昭和26年ごろの宮崎は戦後の貧しさが残っていた。小学校低学年の頃は、おやつ代わりに友人も私も草を食べていた。その後、高度成長期、バブル期、バブル崩壊を経験した。自分の人生を振り返るにはまだ早いと思うが、次に年男になる84歳の時には、記憶が薄れている可能性がある。そこで、私の経験の中で他の人があまり経験しないことを、エピソードとして箇条書き風に綴ることにした。

小学生の頃の私は、授業中に周りの友達としゃべってばかりいた。通知表には毎回、「おしゃべりが多い」と書かれていた。ある日、私がしゃべっていると、先生が算数の問題を質問した。それに答えると、先生が「後藤君はすぐに理解できるので、授業が退屈なのね」と言った。また、私には宿題をするという考えがなかった。ある夜、友達が母親と一緒に家に来て、「宿題でわからないところがあるので、聞きに来た」と言った。その時、私は「宿題は、するものなんだ」と思った記憶がある。

当時の成人男性は戦争に行った人ばかりだったし、女性は空襲の中を生き延びた人達だった。そこで、人が死ぬことに比べれば、子供の変った性格は問題ではなかったのだろう。その証拠に、小学5年生の時に私は鼓笛隊の隊長を命じられた。今、私が小学生だったら、アスペルガー症候群と診断されて、特殊学級に入れられる可能性がある。そして、東大に入学することも、医者になることもないだろう。

小学6年生の時に「4当5落」という言葉を知った。大学受験では、4時間睡眠なら受かり、5時間睡眠では落ちるという意味である。そこで、私は中学1年から毎日、夜7時から夜中の2時まで勉強した。ただし、土曜日は一切、勉強しなかった。そして、この生活を東大に受かるまで続けた。夜中の2時に寝て、朝の6時半に起きるので、4時間半睡眠である。1歳と3歳年上の二人の兄の身長は私より10cm高い。つまり、私は睡眠不足で身長が10cm縮んだことになる。

高校3年の時に、担任教師に東大を受験することを告げた。当時の宮崎県では宮崎市から毎年、3～5人が東大に受かっていたが、延岡市からは0だった。私の高校では10年ほど前に1人、東大に受かったことが伝説になっていた。私の高校の教師達の教え方では東大に受からないと思ったので、私は2年計画を立てていた。つまり、現役の時落ちることはわかっているが受験して、東大の雰囲気や試験問題に慣れ、1年浪人して受かる計画である。このことは誰にも話さなかった。

3年生の冬に担任と母と私で3者面談が行われた。担任が「進路判定会議でお前の事が笑い話になったぞ。お前は厚顔無恥だ」と言った。私は「厚顔無恥とはどういう意味ですか」

と質問した。担任は「恥を知らないということだ」と答えた。私は心の中で「生徒が自分の判断と責任で進路を選んでいるのに、それを笑う教師達のほうが厚顔無恥だ」と思った。

その日の夜、父は私に「担任が九大なら受かるだろうと言っているのだから、九大でいいじゃないか」と言った。母は「私は博茂を信じる」と言った。私が1年浪人して東大に受かった日に、父は涙を流して喜んだ。合格して帰省した日に妹が言った。「今日、学校で英語の教師が『今年、東大に受かった後藤君は英語の辞書1冊分の英単語を覚えていた』と言ったけど、本当？」私は「俺は英単語を覚えるのが苦手だ」と答えた。

東大では第一高等学校時代からある駒場寮に入寮した。駒場寮は戦前に建てられたが、鉄筋コンクリートでできた3階建ての建物だった。部屋の床はフローリングで天井は高かった。また、戦前から全館スチーム暖房で、冬の室内は暖かかった。

駒場寮では寮生はゴミ箱を持たなかった。ゴミはすべて、床に捨てた。タバコもフローリングの床に落として、靴で踏んで消すのが当たり前であった。数か月経って、部屋の床がゴミだらけになると、廊下に置いてある大きな籐の籠を部屋に引っ張り込み、部屋中のゴミを入れて廊下に出した。

当時、駒場寮では一部屋を3～5人で使い、ベッドと机と本棚は常備されていた。私は2人の友人と3人で共同生活をした。1人の友人には東大生の彼女がいた。夜になると、その友人が、彼女が今日、言ったことを話してくれた。私ともう1人の友人は、その話を関心なさそうな態度で聞いていた。後年、安部内閣の閣僚名簿に彼女の名前を発見した時は大変驚いた。彼女は代議士になり、法務大臣を3度務めた。また、2人が20歳の頃の純愛を貫いたことも驚きである。

東大を卒業後は就職して会社員になったが、勉強して生活できる職業に就きたいと考えようになった。学者になっても生活は安定しないが、医者なら勉強と生活が両立できると考え、医学部を再受験することにした。決めてから2週間後に退職した。

27歳の時に九大医学部に入学した。九大では2年間の教養課程のうち、1年分は東大の履修科目が認定された。その結果、1年で教養課程が修了した。教務課に行って、飛び級の可能性を聞いたが、「去年までは飛び級ができたが、今年からできなくなった」と言われた。1年間、自由に過ごすように言われた。その頃、母は延岡で1人住まいであった。延岡の医療機関でアルバイトをすれば、親孝行ができて、医療の一部も学べるのではと考えた。当時の延岡市医師会会長に「私を雇ってくれる医療機関はありませんか」という内容の手紙を送ると、すぐに、「私の所で働きなさい」と返事が来た。

医師会会長の病院は100床前後の消化器外科の病院であった。毎日、胃や胆嚢の手術があり、1か月に3～4人の患者さんが癌で亡くなっていた。また、久留米大学の医師が半年交代で勤務していた。私はレントゲン室の手伝いをした。レントゲン室は、午後は暇なので、1か月後に、午後は院長の回診につき、その後、手術の助手をするように言われた。手洗いとガウンテクニックを習い、第2助手として術場に立った。学生なので、遠慮して手を出さずにいると、ある日、院長から「手を動かさなさい」と叱られた。驚いた私は、手術後に医

師から手術手技書を借りて、手順を必死に覚えた。また、その本の最初に助手の心得が書いてあったので、次の手術からは術者が操作しやすいような場を作ることを心掛けた。

毎日、3～5例の手術の助手をしていると、やがて、大事な局面が終わると院長が術場を離れ、医師と私で残りの操作をするようになった。手術が少ない日は、病棟で看護師さんたちが採血と点滴を教えてくれた。当時、アメリカでは医学生が早い段階から病棟に配置されることが良いことと考えられていた。私は1年間で約500例の手術の助手を務め、病棟回診では沢山の癌患者さんが亡くなっていく姿を見てきた。私以上の臨床経験を積んだ医学生はアメリカにもいなかったのではないかと思う。3年生から始まった九大医学部の授業では、私は一番前の席に座って、すべての講義のノートを取った。授業の途中で教室を抜け出す学生の目には、私の姿は奇異に映ったかもしれない。しかし、私の頭の中には、病気で亡くなった多くの患者さんの姿があった。

この病院での生活で忘れられない思い出がある。ある日の午後、病棟に行くと、婦長が「癌末期で自宅に帰る高齢の女性がいます。退院する前に聴診器を当ててくれませんか?」と言った。「僕は学生だから無理です」と答えると、「患者さんが安心するから、形式でいいんです」と言われた。仕方なく病室に行き、聴診を終えると、患者さんが満面の笑みで「先生は本当に素晴らしいお医者さんですね」と言った。私は医者ではないので愕然としたが、「有難うございます」と言って部屋を出た。1週間後に、自宅で亡くなったと家族から連絡があった。死亡診断に出かける医師について行くと、田畑の中の大きな農家だった。その方は座敷の布団の中に安置されていた。医師が死亡確認をしている傍に正座して、私は「自分が医者になった時に、『素晴らしいお医者さんですね』と言われる日が来るだろうか」と思っていた。

医者になって6年目に教授命令で大学院に進学し、理学部生物学科の大学院で分子生物学の研究を4年間、行った。当時の医学部には分子生物学の技術がなかったので、理学部の技術を持ち帰ることが目的だった。朝9時から夜12時まで週6日間、研究を続け、2年半後に細胞周期を調節する新しい遺伝子を世界で初めて見つけた。私の学位論文は世界的雑誌に載っている。また、2000年に乳児を含む子供3人を連れて、ハーバード大学医学部に留学した。大学院生時代やアメリカ留学中にも、他の人が経験できない沢山の出来事があったが、紙面の都合で割愛する。

最後に、医師としての私の心の支えと座右の銘についてお話する。私の心の支えは大阪にある「適塾」の塾生部屋の柱である。適塾は1838年に緒方洪庵先生が作った西洋医学塾である。福沢諭吉が「福翁自伝」に適塾での生活を詳しく書いている。2階の塾生部屋は20畳ほどの広さで、塾生は各自、畳1枚を生活の場としていた。その部屋の中央に木の柱があり、柱には沢山の刀傷が付いている。塾生は侍なので刀を持っており、血気に任せて刀で切り付けたのである。適塾でその柱を触ると、江戸時代後期の医学生の情熱が私の中に入って来る気がした。今は柱に触ることが出来なくなっているが、大阪に行った時は必ず適塾に行き、その柱から英気を貰っている。また、大阪に行かない時でも、医療に疲れたら、あの柱を思い浮かべるようにしている。

座右の銘は18世紀のオランダの医師、フーフェラントが書いた「医戒」の最初の文章である。緒方洪庵先生はこの本の重要性に気づき、塾生に講義を行っている。また、東大時代の医学部の私の友人は、2年生の時に、ドイツ語の教科書として読んでいた。つまり、当時の東大では、この本の翻訳試験に合格しなければ医学部を卒業することが出来なかった。

「医戒」の最初の文章は江戸時代の翻訳を引用すると、「病メル者ヲ見テ、コレヲ救ハムト欲スル情意、是、即、医術ノ由テ起ル所ナリ」である。意味は「病気の人を見て救いたいと思う気持ちが、医療の始まりである」になる。日々の診療に迷いが生じた時は、適塾の柱と同様に、この言葉を思い出して、自分を正しい医療の道に戻すようにしている。